一般社団法人
日本建築学会

建　築　文　化　週　間　2026

トウキョウ
建築まち歩き

早稲田逍遥

http://bunka.aij.or.jp/machiaruki/

早稲田逍遥

今回のまち歩きのルートは、早稲田大学西早稲田キャンパスを出発して早稲田キャンパスまで。直線で結べば約1kmそこそこの距離ですが、いくつもの見どころをめぐりながら、足で地形を感じ、歴史の痕跡を訪ね、早稲田大学キャンパスの諸建築をはじめ、主に早稲田に関係の深い建築家たちの作品を見ながら、ぐるぐると「逍遥」します。

台地と谷

山手線に乗って高田馬場駅から目白駅に向かうと、東西に長い崖（目白崖線）が見えてきます。武蔵野台地に切れ込んだこの深い谷を刻んだのは現在の神田川、かつての平川の川筋です。

井の頭公園の湧水池を水源とする神田川に、杉並区の善福寺公園の善福寺池から流れる善福寺川が、中野区との区界あたりで合流し、そこに杉並区の妙正寺池から流れる妙正寺川が下落合あたりで「落ち合って」います（現在は地下分水路でより下流で合流）。武蔵野台地の水を集めた3本の川の流れが崖線と広い谷戸をつくったわけです。

地図を見ると、崖線を縁取るように走る標高20mの等高線が、台地と低地の境界になっていることがわかります。低地は川の氾濫域と、縄文時代に海面が上昇したときの海底だったため、ほとんど平らです。たとえば早大早稲田キャンパス前（標高約9m）から山吹町交差点（標高約7m）に延びる区道「早大通り」（約950m、昭和27/1952年開通）の高低差は僅か約2m。それもそのはず明治17（1884）年までの測量の地図によれば、この辺りはほとんど水田（早稲田田圃）でした。水田に囲まれた開校間もない東京専門学校（明治15/1882年設立、早稲田大学の前身）の写真が残されています。そのさらに東側の神田川の南側の地域は、沼地だったところが江戸時代に順次埋め立てられ、明暦の大火（振袖火事、明暦3 / 1657年）の後には町民地や武家地になったようです。

神田上水

江戸時代には江戸のまちを洪水からまもるために、新たな流路を開削して川の流れを変える大土木工事が行われましたが、洪水対策と同時に重要だったのが飲料水の確保でした。江戸の下町では、潮の干満によって海水が川を遡り、井戸水にも塩分が混ざっていて、どちらも飲用に適するものではなく、そのために幕府が最初に整備したのが神田上水といわれています。

神田川に堰（関口大洗堰）をつくって水位を上げ、塩気のない真水を分水路に導きました。分水路は神田川の北側を通り、真水が水戸藩下屋敷の泉水（小石川後楽園）を経て神田川を橋（御茶ノ水懸樋）で渡り、神田や日本橋などの下町に給水されたのです。神田上水が整備されたのは、水戸藩邸の園地が開かれた寛永6（1629）年以降とされています。

なお、玉川上水が整備されて多摩川の水が市中に行き渡るのは、承応3（1654）年以降のことでした。

戸山荘と箱根山

早大西早稲田キャンパスから明治通りを渡り、坂を下りた先が戸山公園。江戸時代の尾張徳川家下屋敷「戸山荘」の広大な庭園の一部でした。戸山荘が整備されたのは、尾張徳川家2代の徳川光友が、寛文8（1668）年と寛文11（1671年）にここに土地を得てからでした。その庭園にあったのが箱根山（玉圓峰、明治以降に箱根山と呼ぶようになった）で、山手線内の最高峰です（標高44.6m）。箱根山を「池を掘った土で築いた人工の山」とする資料（東京都公園協会ほか）もありますが、「古墳の墳丘をそのまま活用したか、池を掘った土砂をかぶせてより高く盛り上げた可能性がある」（落合道人）と見る方が自然のように思えます。この付近（かつての戸塚村）には古墳が多く、かつて早稲田キャンパス内にあった富士塚の「高田富士」も古墳を利用したものであったようです（玉圓峰が箱根山と呼ばれるようになったのは、この富士山があったからかもしれません。高田富士は、早稲田大学と水稲荷神社が土地を交換するかたちで甘泉園公園の南に移設されています）。

大名庭園といえば、旧大隈重信邸の大隈庭園、新宿区立甘泉園公園、神田川北側の文京区立肥後細川庭園、椿山荘（旧山縣有朋邸）の庭園は、いずれもかつての大名庭園でした。この地に限らず、高台の斜面は、池泉庭園に注ぐ地下水が湧く大名屋敷に適した場所だったのです。

陸軍戸山学校 → 戸山ハイツ → 戸山公園

戸山荘の敷地は、明治7（1874）年からは陸軍用地として陸軍戸山学校や射撃場が置かれ、西側の戸山ヶ原にも軍用地が拡張されていきます。戦後は国有地となって、広大な都市公園が計画されますが、戸山荘があった場所には深刻な住宅難を解消するための平屋の木造住宅団地「戸山ハイツ」（1949年、1,052戸）が建設され、順次中高層の集合住宅に建て替えられていきます。戸山ヶ原にも昭和23（1948）～昭和29（1954）年にかけて、RC造の集合住宅69棟1,928戸が建てられました。

わずかに残された箱根山周辺が都立戸山公園（箱根山地区）として開園したのは昭和29（1954）年です。

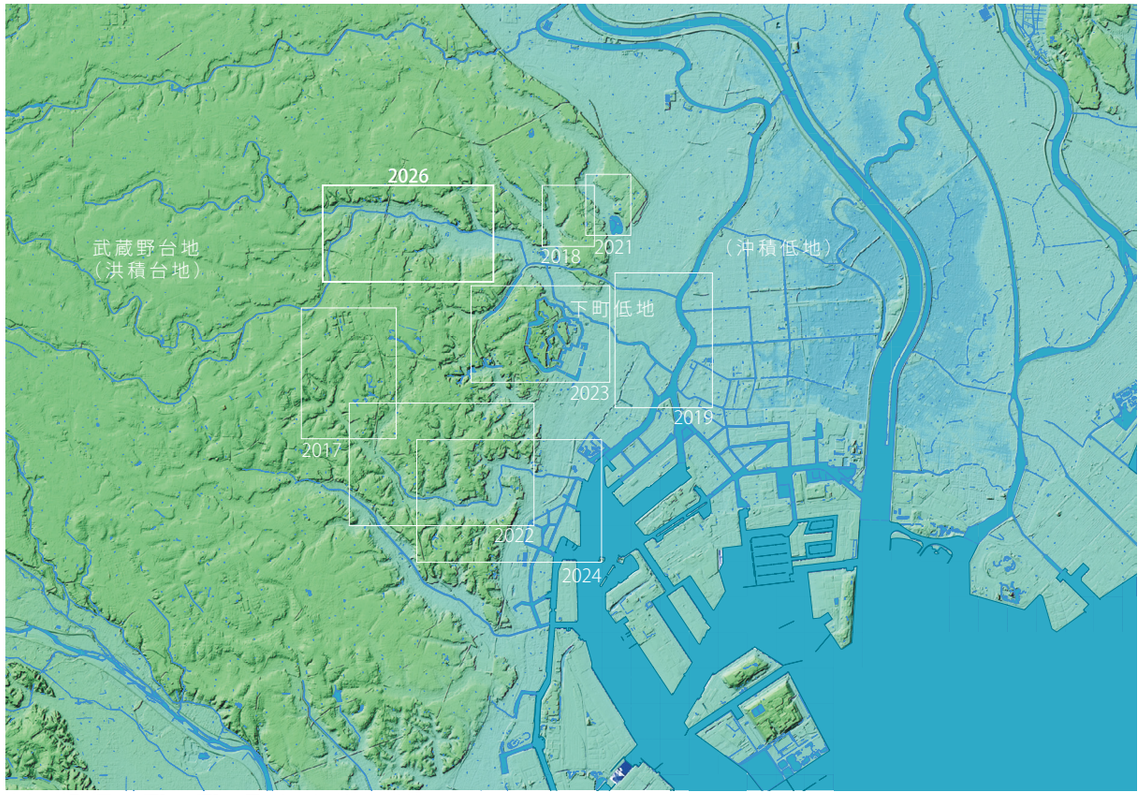
文教地区計画と早大通り

前述の「早大通り」は、中央分離帯から枝を伸ばすケヤキの巨木が美しい緑蔭通りです。この通りの前身は、明治35（1902）年に早稲田田圃が宅地化されて開通した早稲田新道。高田馬場駅が開業（明治43/1910年）する前は、鶴巻町辺りが学生街の中心でした。

戦後間もない昭和21（1946）年に、本郷（東京大学）、早稲田（早稲田大学）、神田（日本大学）、大岡山（東京工業大学）の文教地区の計画が各大学に委託されます。その早稲田地区施設配置計画の一部が、早稲田新道を拡幅した早大通りとして実現したのは、早稲田大学創立70周年の年（昭和27/1952年）でした。早稲田文教地区計画は、非常勤講師だった石川栄耀（都市計画家、東京都道路課長・都市計画課長）が関わり、秀島乾、松井達夫、武基雄らが設計に加わっていました。当初から広い歩道のあった早大通りは新宿区で最初（昭和63/1988年度）に無電柱化された道路のひとつです。

早大西早稲田キャンパス

建築学科のある西早稲田キャンパスの敷地は、戦前、陸軍の射撃場で、長さ300mの細長いカマボコ状の建屋が7棟並んでいました。戦後、GHQの接収解除後に国有地となり、早稲田大学に払い下げられて、昭和42（1967）年に理工学部が早稲田キャンパスから全面移転します。大隈記念講堂（佐藤功一・佐藤武夫｜昭和2/1927年）の時計塔と大隈重信の銅像（朝倉文夫作｜昭和7/1932年）を結ぶ直線は、早稲田キャンパスの主軸線ですが、その軸線の延長上に、西早稲田キャンパスの中心建物の51号館（安東勝男｜昭和42/1967年）が建っているのです。



東京の地形（国土地理院 地理院地図アナグリフ(カラー)より）



まち歩きルートと周辺の地形（国土地理院 基盤地図情報を使用）

行程距離：約6km

トウキョウ建築まち歩き——早稲田逍遥



早稲田大学 西早稲田キャンパス51号館 ❶

昭和42（1967）年竣工。安東勝男が設計、松井源吾が構造を担当した理工学部の高層校舎。柱・梁の架構を明瞭に表す外観が特徴。教室棟や実験棟と回廊で結ばれ、中庭を囲むキャンパスの一角をなす。「早稲田大学理学部校舎」としてキャンパス全体で日本建築学会賞受賞。

早稲田大学理工カフェ

平成21（2009）年、古谷誠章設計。明治通りの歩道拡幅や副都心線・西早稲田駅の開通に合わせて計画された。既存のケヤキを避けるようにコンクリートスラブの屋根が浮遊する。

学習院 旧正門

明治10（1877）年、神田錦町の華族学校の正門としてつくられた鋳鉄製の門。和風と洋風の装飾を組み合わせ、近代初期の意匠を伝える。移転を重ね、昭和24（1949）年に戸山へ移された。国の重要文化財。

日本駐車ビル

明治通りに面する大規模な駐車場建築。昭和38（1963）年5月、1,000台を収容する戸山駐車場ビルとして竣工。自動車の普及が進む時代の都市施設で、現在は事務所や倉庫としても使われている。

箱根山 ❷

標高44.6mの山手線内最高峰。江戸時代、尾張徳川家の戸山荘の庭園にあって、「玉円峰」と呼ばれた。現在は戸山公園の中心的な景観となり、樹木に囲まれた斜面と山頂への階段に、大名庭園の地形が受け継がれている。

陸軍戸山学校跡記念碑

明治6（1873）年から終戦まで置かれた陸軍戸山学校を記念する碑。箱根山の麓に立つ。尾張徳川家の庭園から軍用地へ、さらに戦後の公園や住宅地へと移り変わった、戸山の土地の歴史を伝えている。

日本基督教団戸山教会 ❸

昭和25（1950）年、戦後の戸山ハイツの建設に伴って誕生した教会。旧陸軍用地に生まれた住宅地で、人びとの心の拠り所と交流の場を担った。箱根山の麓に立つ建物は、戸山の戦後の歩みを伝えている。

早稲田大学 戸山キャンパス ❹

村野藤吾が設計した昭和37（1962）年竣工の31号館が残る。正門からの大スロープが教室棟を抜け、中庭へ導く構成が特徴。建て替えられた33号館にも、旧館の格子状の意匠やモザイク床、壁のタイルレリーフなどが継承されている。

早稲田大学 高石記念プール ❼

大正13（1924）年のパリ五輪で、日本水泳初の入賞を果たした高石勝男の功績を記念するプール。現在の施設は戸山キャンパスのカフェテリア地下にあり、25m、6コースの屋内プールとなっている。戸山カフェテリアが入る38号館は平成4（1992）年竣工、菊竹清訓の設計。

早稲田奉仕園 ❺

大正10（1921）年竣工のスコットホールを中心とする寮を伴う交流の場。ホールはW.M.ヴォーリズの図面を基に今井兼次が最終設計を行った。赤煉瓦の建物は、教会の礼拝や学生・市民の集会、演奏会などに使われてきた。敷地内には富田玲子設計の展示施設「wam」もある。

穴八幡宮 ❻

早稲田の高台に鎮座する八幡宮。社伝では康平5（1062）年、源義家が八幡神を勧請したことに始まるという。「一陽来復」の御守や高田馬場の流鏑馬で知られ、石段と広い境内が学生街に歴史ある景観をつくる。

ＮＷハウス

昭和61（1986）年竣工。早川邦彦による複合ビルで、当時は1階がギャラリー、最上階がアトリエで、その間の階は集合住宅であった。上部には半ヴォールトや円筒などの幾何学的ボリュームが設置されている。

高田馬場跡

寛永13（1636）年、旗本の馬術や弓術の訓練場として設けられた馬場の跡。現在の早稲田通りと、その北側の茶屋町通りの間にあった。徳川吉宗の時代には流鏑馬が行われ、今も穴八幡宮の祭事に受け継がれている。

水稲荷神社

水の霊験への信仰を伝える神社。もとは現在の早稲田大学構内にあったが、昭和38（1963）年に現在地へ移された。境内には江戸時代に築かれた富士塚「高田富士」（夏至のみに入山可能）も移され、早稲田の民間信仰の歴史を伝えている。

甘泉園公園

徳川御三卿・清水家の下屋敷だったとされ、明治には相馬家の邸宅となった地に残る回遊式庭園。名は、お茶に適した湧き水に由来する。ひょうたん形の池と築山、樹木がつくる起伏に、大名庭園の面影が感じられる。

早稲田駅（都電）

都電荒川線「東京さくらトラム」の終点、早稲田停留場。新目白通りの中央に乗降ホームが置かれ、1両の電車が折り返す。神田川や早稲田のまちへ歩き出す入口であり、路面電車の残る東京の風景に出会える。

松本伸理容室

店主である松本伸氏が同じ早稲田大学卒業生である菊竹清訓に設計を依頼し、昭和40（1965）年に竣工。ファサードには2本のH鋼が効果的に使用されている。

肥後細川庭園 ❽

幕末には熊本藩細川家の下屋敷、のちに本邸となった敷地に残る庭園。台地の斜面と湧水を生かした池泉回遊式の構成で、池の周囲を歩くと景色が変化する。神田川沿いの低地から目白台の高台へ続く地形も見どころ。

松聲閣

細川家の学問所として使われたとされ、一時は住まいにもなった木造建物。大正期に改修された姿を受け継ぐ。保存修復と耐震改修を経て平成28（2016）年に再開し、庭園を望む休憩・集会の場として活用されている。

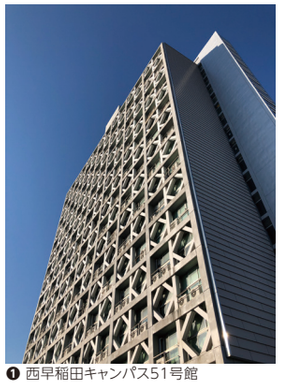
関口芭蕉庵

松尾芭蕉が延宝5（1677）年から約3年間、神田上水の改修に携わりながら暮らしたと伝わる地。のちに門人らがその足跡をしのぶ庵を営んだ。現在の建物は戦後の再建で、庭園とともに芭蕉ゆかりの史跡を伝えている。

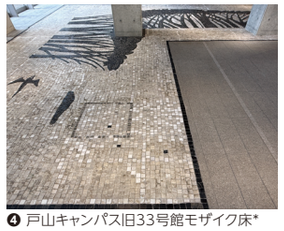
胸突坂

神田川の駒塚橋付近から目白台へ上る、約65mの急な階段坂。坂下では水神社と関口芭蕉庵が向かい合い、坂の両側を緑が包む。名前のとおり胸を突くような勾配に、川沿いの低地と台地の高低差が現れている。

（撮影：加藤詞史、*大森晃彦）


❶ 西早稲田キャンパス51号館


❷ 箱根山山頂*と登山道*


❹ 戸山キャンパス旧33号館モザイク床*


❼ 高石記念プール上階のアトリウム*


西早稲田キャンパス55号館より戸山公園の緑を望む。
右端が箱根山。中央奥が戸山キャンパス。
左端奥が早稲田キャンパス。


❸ 日本基督教団戸山教会


❺ 早稲田奉仕園


神田川に架かる駒塚橋より見る


❻ 穴八幡宮


❽ 肥後細川庭園


❾ 早大通り


❿ たいやき浪花家


⓫ 大隈記念講堂


⓬ 三品食堂


⓭ 坪内博士記念演劇博物館


⓮ 坪内博士記念演劇博物館


⓯ 大隈重信像と大隈記念講堂


⓰ 會津八一記念博物館

永青文庫

昭和25（1950）年に細川護立が設立した美術館。細川家に伝わる歴史資料や美術工芸品を保存・公開する。建物は昭和初期に建てられた旧家政所で、かつて家の事務を担った空間が、文化財を伝える場へ転用されている。

椿山荘三重塔（圓通閣）

大正14（1925）年、広島県の竹林寺から椿山荘へ移築された三重塔。室町時代前期の部材を残すとされる。平成の大改修を経て「圓通閣」と名づけられ、庭園の高所に立つ姿が椿山荘の景観を象徴する。国の登録有形文化財。

神田上水取水口大洗堰跡

神田上水の水を堰き止め、江戸市中へ分水した取水施設の跡。江戸の水道を支えた大洗堰は昭和8（1933）年に廃止された。現在は江戸川公園の碑や復原された石組みが、都市を支えた水道の仕組みを伝えている。

江戸川公園

関口台地（関口二丁目付近）の南斜面と神田川沿いに広がる、東西に細長い公園。昭和59（1984）年の河川拡幅に伴って改修された。川沿いの桜並木に加え、樹木を傷めないよう地面から浮かせた斜面の遊歩道が、変化に富む散策路をつくる。

江戸川橋

かつて「江戸川」と呼ばれた神田川に架かる橋。周辺の川は昭和40（1965）年までその名で呼ばれていた。上流には江戸川公園が続き、川沿いの緑と市街地を結ぶ歩行の接点として、流れや両岸の景色を見渡せる。

江戸川橋地蔵通り商店街

入口の「子育地蔵尊」が目印となる商店街。明治期、近隣の工場へ通う人々を相手に茶や団子を売る店から発展した。十字に延びる通りに食料品店や飲食店などが並び、江戸川橋周辺の暮らしを支える身近な買い物の場となっている。

江戸川ばし たいやき浪花家 ❿

地蔵通り商店街に店を構えるたい焼き店。長く受け継いできた自家製の餡を使う。買い物や散策の途中に立ち寄れる店のひとつで、商店街の食の楽しみと、日常の小さな寄り道の場をつくっている。

渡邊坂（新宿区中里町）

現在の江戸川橋通り。中里町と天神町の境を北へ下る坂。名は江戸時代に近くにあった旗本屋敷にちなむ。神楽坂側の高台から早稲田方面の低地へ移る地形を感じられ、沿道の建物や路地を見ながら、まちの起伏をたどることができる。

早大通り ❾

大学の正門前から東へ延びる通り。明治35（1902）年に開通した旧鶴巻通り（早稲田新道）を拡幅したもので、早大通り計画につながる「早稲田文教地区計画案」（『新建築』昭和22年12月刊）に掲載。戦前には古書店が集まった。大学と周辺のまちを結ぶ道の歩みは、戦後に早稲田通りへ広がった古書店街とともに、学生街の成り立ちを伝える。

早稲田鶴巻町

早稲田大学の東側に広がり、印刷・製本業が集まる地域。大学周辺の古書店街とあわせて、書物をつくり、売り、読む仕事が近接する早稲田の一面を伝える。学生街のにぎわいのそばに、本を支えるまちの営みがある。

ドラード和世陀

昭和58（1983）年、梵寿綱が芸術家たちとの協働でつくった店舗併設の集合住宅。壁面の彫刻や入口の天井から下がる大きな手など、建築と美術が一体となった造形が特徴。街角に現れる豊かな装飾が、歩く人の視線を誘う。

早稲田観音寺

延宝元（1673）年創建の寺院。現在の建物は平成8（1996）年、石山修武の設計による。「水」を主題とし、大きな銀色の雨樋が屋根からの雨を受け、花壺へ導く。雨や植物を取り込む仕掛けが、都市の寺院に独特の表情を与える。

大隈記念講堂 ⓫

昭和2（1927）年竣工。佐藤功一・佐藤武夫の設計、内藤多仲の構造による。大隈重信の「人生125歳説」にちなむ高さ125尺、約38mの時計塔を片側に置く非対称の構成が、大学の正門前を印象づける。国の重要文化財。

大隈庭園

大隈重信が明治7（1874）年に購入した大名屋敷の庭園を基に整えた庭。大隈の没後、大学へ寄贈された。池や樹木のある日本庭園と広い芝生が共存し、講堂の隣に、学生や来訪者が憩う緑豊かな空間をつくる。

會津八一記念博物館 ⓰

大正14（1925）年竣工。今井兼次の設計、内藤多仲の構造によって竣工した旧大学図書館。平成10（1998）年に博物館へ改修された。大階段やヴォールト天井を持つ旧閲覧室に、学びの場の空間が受け継がれている。

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 ⓭ ⓮

昭和3（1928）年、坪内逍遙の古稀とシェークスピア全集翻訳の完成を記念して設立。今井兼次らが英国のフォーチュン座を模して設計した。正面の張り出しは舞台、前庭は観客席に見立てられ、建物自体が劇場の資料となる。

大隈重信像 ⓯

昭和7（1932）年、大学創立50周年と大隈重信没後10年を記念して建てられた、朝倉文夫作の銅像。ガウン姿の大隈が講堂の方向を向いて立つ。講堂と像を結ぶ軸線が、大学の歴史を象徴するキャンパスの景観を形づくる。

御手植樹（大正天皇植樹紀念碑）

明治45（1912）年5月17日、皇太子時代の大正天皇の来校に際して植えられた月桂樹を記念する。傍らの碑は大正2（1913）年の建立。樹木と石碑が、大学の歩みと皇太子来校の出来事を伝える記念の場所となっている。

杉原千畝レリーフ

第二次世界大戦下、リトアニアでユダヤ人避難民らに日本通過ビザを発給した外交官・杉原千畝を顕彰するレリーフ。大正7（1918）年に早稲田へ入学した杉原の没後25年を機に、平成23（2011）年、11号館と14号館の間に設置された。

高田牧舎

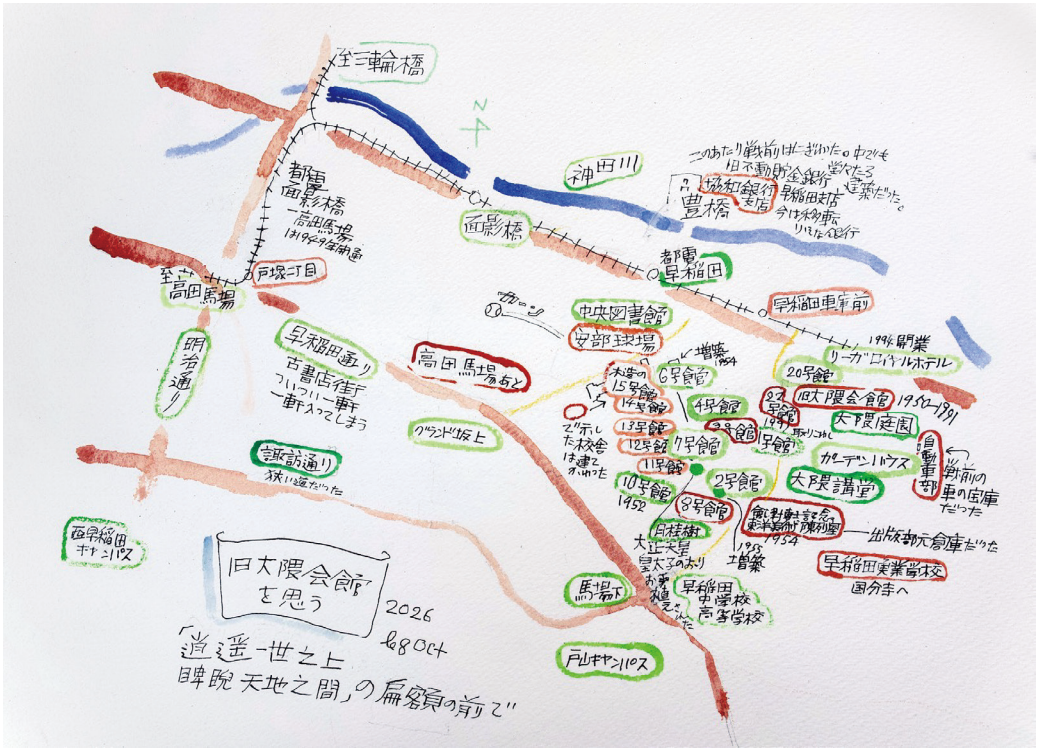
明治38（1905）年創業。牛乳を供するミルクホールに始まり、学生や教員に親しまれる洋食店へ発展した。現在は薪窯のピッツァなどを提供するイタリア料理店。大学正門前で、早稲田の食文化の変遷を伝える店である。

メルシー（軽食&ラーメン）

昭和33（1958）年創業。喫茶店として始まり、煮干しの風味を生かした醤油ラーメンや、オムライス、ポークライスで学生に親しまれてきた。令和6（2024）年の一時休業を経て営業を再開し、早稲田の定番の味をつないでいる。

三品食堂 ⓬

昭和40（1965）年、学生帽を扱う帽子店から食堂へ転じて開業。店名は牛めし・カレー・とんかつの三品に由来する。三つを組み合わせた「ミックス」など、学生の注文から育ったメニューに、大学と店の長い関係が表れている。



藪野 健　旧大隈会館を思う 「逍遥一世之上睥睨天地之間」の扁額の前で（水彩、墨）

企画・執筆／ナビゲーター：

大森 晃彦（おおもり・あきひこ｜日本建築学会建築文化事業委員会、建築メディア研究所）
加藤 詞史（かとう・ことふみ｜日本建築学会建築文化事業委員会、加藤建築設計事務所）
森藤 文華（もりとう・ふみか｜日本建築学会建築文化事業委員会、2.5 architects）
葛 沁芸（かつ・しんげい｜日本建築学会建築文化事業委員会、2.5 architects）


（撮影：加藤詞史）

協力：

後藤 春彦（ごとう・はるひこ｜早稲田大学副学長）
西本 邦治（にしもと・くにはる｜早稲田大学キャンパス企画部）

発行　日本建築学会 建築文化事業委員会
発行日　2026 年 10 月 31 日

©日本建築学会 建築文化事業委員会 2026
不許複製

建築文化週間 2026
主催　日本建築学会
後援　日本建設業連合会、日本建築家協会、日本建築士会連合会、日本建築士事務所協会連合会
協賛　大林組、鹿島、清水建設、大成建設、竹中工務店、梓設計、久米設計、佐藤総合計画、三晃金属工業、東京メトロ、日建設計、日本設計、三菱地所設計、山下設計、NTT ファシリティーズ
特別協賛 YKK AP